高原

小田島孤舟著

高原

小田島孤舟著

第七歌集

高原

小田島孤舟著

目次

花……一
卒業式後に……六
ピンポン臺にて……七
姫神登山……九
中津河畔にて……一〇
曉烏師を迎へて……一〇
小山田行……一二
龍澤寺にて……一四

沼宮内にて……一四
窓前情景……一六
廣全寺にて……一七
名乗にて……一八
古宇田清平君を送る……一九
小岩井にて……二〇
歳晩抄……二一
御成婚を祝しまつりて……二三
外遊上途の適千里へ……二六
卒業式の前後……二七

觀武ケ原にて……二八
公園の櫻……三〇
種馬所にて……三二
小岩井行……三二
大慈寺にて……三六
木蓮咲き一八咲く……三七
澁民村の寶德寺にて……三八
獨居して……三九
岩手山に登りて……四〇
早池峰登山の歌……五六

和賀仙人行……六八
一本木松原にて……七七
小岩井牧場……七八
千鶴子病む……八四
觀武ヶ原にて……八九
平泉にて……九一
病める妻の傍にて……九三
一本木にて……九六
鷲宿行……一〇〇
冬日抄……一〇三

花弁

寸ばかり伸びし莖より白々とクロッカスの花
咲きいでにけり

角ぐみし苞のなかよりふくらめる蕾はほぐれ
クロッカスの咲く

萠え出でしばかりの青き莖をわけうす紫のクロッカスは咲く

小さなる鉢に角ぐむクロッカスほの〳〵としも蕾開けり

角ぐみし蕾のさきの紫にほころびそめぬクロッカスの花

拔けいでし青き莖より次ぎ〳〵に蕾ほころびクロッカスの咲く

櫻散り八重山吹の咲き次げるわが狹庭邊に夏は來にけり

桃さくら散りてほの〳〵咲き次ぐは瀨戸の庭べの山梨の花

花のみは白くゆれつゝ茂り葉のそよぐは見え
ず宵闇の庭

晴れしまゝ暮れ行く空の薄明り萩の下葉のか
げを濃くせり

夕明りさし來る庭の片隅に一ひら白し飛燕草
の花

しげりゆく萩の下枝の白き花しるくも見ゆれ
月の明りに

草そよぐ音のかそけき庭の面に間遠に鳴けり
朝のこほろぎ

蟲の聲とぼしくなりぬ朝明けの庭の小草に風
は立ちつゝ

月させばひかる花ありはる〳〵と畝のつゞき
しダリヤ畑に

一しきりそよげる黍の穂の上に曇るともなく
月はかかれり

卒業式後に

三月二十一日

ひろ〳〵としたる講堂にむなしくも數百の椅
子は殘りけるかな

ピンポン臺にて

ピンポンの音朗らかにひゞきつゝ長き廊下の
しづかなり春

ドア押せばひとしほさえてピンポンの音朗か
にひゞきたりけり

ドア押せばみないちやうにふりむけるなかの
一人(ひとり)にこゝろうごけり

打ちかへす手の曲線をすべりたる春の光の長(のど)
閑(か)なり晝

姫神登山

六月四日

鈴蘭の花盛りとて少女達
よろこぶこと限なし

朝あけを土ふみしめて登りゆく山ふところに
郭公の啼く

中津河畔にて

瀬に立てる岩にせかれて水皺のくるめくあたり河鹿なきをり

曉烏師を迎へて

七月二十三日

座をばさけひとりしづかに欄干にもたれて聞くや泉水の音　（川鐵にて）

しづかなるこゝろをさそふ水の音植込ぬひてひゞき來れり

植込の樹々の梢は灯をうけて見えつゝ闇に水の音する

小山田行

八月二十二日

野を行けばさきをあらそふ吾が子等の麥稈帽
子みゆれ薄のかげに

すゝき野の中にをり〳〵むぎわらの見えがく
れして吾子のこゑすも

立ちおくれ子等をよばへばほど遠きすゝきの
かげにむぎわらのみゆ

吾子ゆけば群がり立ちてさやに鳴きすゝき野
去れり何の鳥かも

さしかゝる花野に吾子のおくるゝを待ちつゝ
聞けり蜩のこゑ

龍澤寺にて

八月二十五日

幼日を遊びし寺におとなへば木々の茂りて蟬の啼きをり

沼宮内にて

八月二十九日

下山君に初めて會ひて、二首

相逢へどいふこともなく停車場をいでて花野にさしかゝりたり

ことあげていふことせねばすべをなみたゞに花野を通りけるかな

窓前情景

めざめゐて桐の葉をうつ雨の音きゝつゝ窓の白むを見たり

窓の邊の桐の葉をうつ雨雫をり〳〵しげし夜明近きに

廣全寺にて

十月二十一日

はからずもつい子に逢ふ

つかれ來て目をとぢをれば裏山の風わたるらし木々のどよめる

名乗にて

十二月廿七日

藍青のきはまりもなき秋空に尾の上のすゝき
ゆさぶりやまず

空をゆく風やあるらむ尾の上のすゝきのむれ
はゆさぶれにけり

古宇田清平君を送る

中津河畔なる盛岡倶樂部にて

河添の窓によりそひ瀬の音を聞くも今宵とな
げきたまひし

小岩井にて

十二月廿五日

遠くより木を伐る音のひゞき來ていよゝ裾野
はしづけかりけり

かれすゝきおびえしごとくゆれてをり音なく
凪ぎし山裾の原

歳晩抄

裏庭にまきわりをれば夕づつのうつりそめけ
り軒のつらゝに

夕餉(ゆふげ)たくまきわりをれば軒さきの雨だれの音
いつか絶えたり

さかしらにありせばわれは歌よまず小田つくりけむうべも乏しき

賢らにわれはありせばうましこの小田うちかへしむべも富みけむ

いにしへゆさかしら人は歌よまず小田をつくりてさきはひにけむ

うつし世を田畑つくりてすぐしえばこゝろのどけくあらましものを（以上十二年作）

御成婚を祝しまつりて

日の皇子は日女をしたがへ日月と並び立たせり民草の上に

久方の雲井の空をどよもして皇子の御典をこ
とほぎやまず

おほみこは日女をしたがへうらやすの國のま
なかに立たせたまへり

うらやすの國いよ〳〵にたひらけく皇子の稜
威になびけ民草

みちのくの雪の中よりほぐ民の歌はもひゞけ
皇子の宮居に

ほがらかに晴れわたりたるみちのくの民のよ
ごとのどよむ朝あけ

うら〳〵と春おとづれしさみどりの空にどよ
めり民のほぎごと

外遊の途に上らんとする適千里へ

春四月八重の潮路をわけてゆく君が旅路につ
つがあらすな

櫻咲く大和島根をふりかへる君がまなざし羊
にかも似む

フォーク持つ手さへたくみにかへり來む夕を
待たなさきく行きませ

卒業式の前後

行くさきのうつくしきことのみしのばれて別
れといへどなげかひをせず

庭さきのヒヤシンスの芽角ぐめば子等と別る
る日となりにけり

日あたりのよき窓縁に並べ置く鉢に何やらん
角ぐめり花

觀武ケ原にて

四月十日

陸軍紀念日なりとて教へ
子等と演習を觀る

さみどりに晴れし野末ゆ砂けむり立つよと見
れば騎馬あらはれし

見る〳〵もおそひ來れる騎兵隊けむりの中に
うすれたりけり

公園の櫻

今朝はしも咲かぬ枝とてなかりけりさき子に
みせんと一日こもれる

見て來よとつま子をやりて居のこれば庭の紅
梅目につきにけり

子等はみな家にあらねばしづかにて庭のさく
らは咲き盛りけり

夕月のさしそむるころ庭の面にさくらの花の
散るを見しかな

うらゝかにさす日のかげのぬくもりにすみれ
の花のさきいでにけり

種馬所にて

五月七日

なごやかに青める牧の草原の日向につどひ鶯
をきく

小岩井行

五月十一日

松風の音にまぎれて山鳩のこゑはきこゆれ山
裾の原

遠里の音ひゞき來て裾原の凪ぎのしづけさい
やまさりけり

萠え出でしばかりの草をふみしめて裾の朝凪
ひとり行くかも

をちこちに鳴きかはす鳥足とめてみれど姿は
あらざりにけり

鳴きかはす小鳥のこゑのうつりつゝ姿はみえ
ず裾の松原

足とめて鳴く音に耳をすましつゝ見いでし鳥
は空をかけれり

羽音のみしるけかれども鳥のかげ目にとゞま
らず山裾の原

空高く鳴きつゝ上りいみじくも羽音をたてゝ
下る鳥あり

白樺の木ぬれかそけくゆれそめて裾の牧場に
夕げむり立つ

なだらかに起き伏す丘の草青み羊の群れのを
ちこちに見ゆ

起き伏せる丘の芝生をふみしめてひとりしゆ
けば羊むれ居り

大慈寺にて

五月十一日

池の面に岸のさつきの赤々とうつりしまゝに
たそがれてをり

庭前に木蓮咲き一八咲く

木蓮の咲きそめしよりいくたびかこの窓の邊
によりそひにけむ

木蓮のうつろひそめし狹庭邊にネル着し童女
遊ぶを見たり

春たけて庭木のかげに一八の花しら〳〵と咲
きそろひたり

澁民村の寶德寺にて

六月二十三日

郭公のこゑの折々遠退くは青葉わたりて風の
吹くらし

獨居して

ひとしきり鷄舍の中にてめんどりのなきたり
ければとやに立ちたり

ともなく日は闌けゆく中にめんどりのけたたましくも鳴きいでにけり

岩手山に登りて

七月二十五日

山裾の宿にしばしと寢につけば庭木おらびて雨つのり來ぬ

庭さきの木々はおらびて雨だれの窓うつ音に目をさましけり

山裾の木原を霧はゆきかひて明けゆくころをひぐらしの啼く

明けぬ間をひとしきりなくかな〳〵のこゑのすがしや山裾の原

萱原の芽花そよぐと見るひまに雨なだれ來て
笠ぬらしたり

山裾の白樺林しぐるればかな〳〵のこゑ遠退の
きにけり

萱原の萱をぬらして通り雨すぎたるあとをか
な〳〵の啼く

深山木の上枝の垂葉うちぬらし雨すぎしあと
かな〳〵のなく

ほがらかになく鳥の音の遠退きてしづけき裾
野村雨のすぐ

頂ゆなだれ來れる白雲のひえ〳〵としも面か
すめけり

麓よりこごしき岩にせかれつゝ吹き上げ來る
八重の白雲

見る〳〵もこごしき岩の谷合を幾群の雲渦卷
きにけり

渦を卷き吹き上げ來る白雲をかすめて飛べり
燕のむれ

峰越しにおそひ來れる白雲の千切れて消えて
青空のいづ

青空は低くも垂れて八重雲のふもとをめぐる
夏の山かな

片そぎの山の傾斜を白雲の立ちも騰りて風を
起せり

白雲の風をおこして峰ごしにうづまき來り木
木をどよもす

風立てば風にさからひ雲湧けば雲をかすめて
燕(つばくら)の飛ぶ

逆巻きて疾風(はやち)の吹けば岩角の燕(つばめ)くづれて散り
うせにけり

片そぎの岩吹きつくる風それてたゞよふ雲の
うづまきにけり

白雲の峰々わたりわが立てる頂さしてきほひ
來れる

たゞよへる雲相打ちてうづまける山ふところ
を岩燕とぶ

逆立てる岩の秀わたり白雲のたゆたへにつゝ
青空に消ゆ

錆色の岩逆立ちてたゝなづく嶺をかすめて燕
とび交ふ

藍青の色を湛へて波ひとつ立てぬ沼みゆ木原
の中に

高山の嶺にのぼりてうち仰ぐ空はつぶらに藍
を垂れたり

靡き伏す裾囘の山に立ちのぼる雲は見る〳〵
雨となりけり

なだらかに遠く走れる裾原の茅萱ぬらして村
雨のすぐ

峰々ゆ雲たちのぼり朝明けをすがしくも
かな〳〵はなく

吹き上ぐる風肌さむくすぎゆきしあとにゆら
げりこまくさの花

焼石のかげより莖をのばしたるこまくさの花
紅に咲きをり

白雲のゆきかひしげき頂にこまくさの花なび
かひ咲けり

雨脚のはやき尾の上に立ちぬれてほのかに匂
ふこまくさの花

つかのまを紅に匂ふらし焼山の小石もたげて
咲ける仙人草

吹き上ぐる風にかそけくゆれてをりお鉢めぐりの道端の花

むら雲のゆきかひしげき石原の石のかげより咲ける仙人草

高山の山懐(やまふところ)にひとこゑを鳴くことをせず飛ぶ鳥のあり

かすめ行く鳥の羽音に見上ぐれば峰越(をこ)しに燕ひるがへりたり

高山の岩をかすめて燕(つばくら)の羽うちかへしひるがへり飛ぶ

吹かれ來し雲は行衛のなきごとくしばしたゆたひ目の前に消ゆ

つぶらかに張りたる空の藍青の深さはまして
嶺つきんとす

藍青のいろふかゝと澄みし空眞上に垂れて
嶺は明き

みはるかす陸のはたてに八重雲の立ちのぼり
をる青き山あり

ふかゝと澄みし眞青の空圓くわが立つ峰に
垂れかゝりたり

雲の上の嶺の尖りにわれ立てば青空低く垂れ
にけるかな

湧き立ちてきはまりもなき群雲のゆきかひし
げし岩の一角

早池峰登山の歌

八月二十五日

川ぞひに岨路のぼれば瀬の音のをり〳〵きこゆ木原をぬひて（七折瀧）

瀬の音のいよ〳〵すみてひゞき來ぬ木立小暗くなりまさるに

水の音いよ〳〵近くきこゆるに木立すかせば瀧つ瀬の見ゆ

やう〳〵に木立のかげの濃くなれる山ふところに瀧はかゝれり

堰きとめて水を放てば岩角ゆ中空かけて虹をゑがける

水涸れてせゝらぐ川の瀬の音のさやかにきこ
ゆ木原深きに

をぐらくも木立深まり瀬の音の間遠になりて
山静かなり

ほとばしり水はきほひて中空に虹ゑがきつゝ
向つ岩打つ

落ちかゝる水はきほひてほとばしり折れて曲
りて岩かどをうつ

おちかゝり二たび三たび岩打てばいよよきほ
ひてほとばしるかも

せきとめて水を放てば岩を打ち空ほとばしり
七瀧をなす

やう〳〵に木立のかげのこくなりてほのかに
白し瀧つ瀬の音

山腹の茅原ぬけてみいでしは麓にともる赤き
火の色

行き暮れて茅原の萱をあてもなくふみわけを
れば笛の音きこゆ

ひとしきり風のわたりし茅原はしづもりにけ
り瀬の音きこゆ（茅野、木立をすぎて）

木原すぎ茅原よぎり行きゆけど谷川の音たえ
んともせず

茅原を風わたり來てすゝき穂のゆらげる上に
早池峰のみゆ

露しげき茅野十里にうちつゞく木立三十里こま鳥のこゑ

この茅野十里をゆかば駒鳥のこゑをきくてふ木立三十里

鳥なかぬこの一時の靜けさにかそけくひゞけ瀧つ瀨の音

うちつゞく河原の石を越えゆけばいたどり十里露しとどなる（河原坊）

ふもと邊の河原の石のつぶらかにならべる間を水ながれをり

雲脚のゆきかひしげくなりにけりいよゝ奥處にのぼり來しはも（登山）

折々は鳥のこゑさへきこえしが靜かなるかも

こゝは頂

そゝり立つ巖をかすめゆきかへる雲なだれ來

て笠ぬらしたり

頂は雲にかくれて見えわかずなだれのはしは

雨となりたり

這松（はひまつ）の枝さしかはし岩の秀（ほ）のつぶらにみゆれ

山のふところ

見上ぐれば岩また岩のかさなりてわがゆく奥（おく）

處（ど）雲はまよへり

まなかひに山のせまれば奥まりていろ濃くみ

えし襞（ひだ）は這松

谷川の音のかすかにひゞき來てしづけき夜半をきり〳〵すなく（岳一泊、畠氏の待遇をうく）

山かげのなぞへの畑の葉煙草の莖ほそ〳〵と蕾を持てり（内川目）

朝霧のしめりをもてる山畑は煙草の花の盛なりけり

川沿ひの傾斜の畑の葉煙草の繁みがなかにこほろぎのなく

葉煙草の薄紅（うすくれなる）に咲きそめし傾斜の畑にきりぎりすなく

秋近み露のしめりに葉煙草の枝さへのびて蕾つけたり

和賀仙人行

九月十四日

朝戸出のはだへすがしく川べりを草わけゆけばこほろぎなけり

夜の明けの山のすがしとをしみ立ち見つゝしあればすゝきゆれたり

朝明けの光すがしき萱原にすみてきこゆれ虫のこゑ〳〵

秋は早や川のほとりの金線草の花とはなりて立ち初めぬらし

あかときの溪の川上あけそめて早瀬の音のほのかに白し

瀬の音のほのかに白く明けそめし溪間の木ぬれそよげるがみゆ

この谿の奥處を見んと浴ひて行く片瀬の河原金線草咲けり

せかれつゝうねり流るゝ谿河の水の青さに秋立つらしも

秋づきて谿ゆく水の澄めるらし底の小石のつばらかにみゆ

川上の早瀬の音はきこえねど目にはさやけき瀬々の白浪

片寄りてゆるく流るゝ水の青かすめて走る山女ありたり

きりぎしの岩角めぐり渦巻ける淀の青さにう
かぶうたかた

川ぞひに切り通したる岨路のうねりの角は瀬
の音高き

いくたびかうねりまがりて谿合を川ぞひゆけ
ど奥處知られず

うねりたる角をまはれば風ありて早瀬の音の
高まりにけり

山襞のいよ〳〵深くせまりつゝ早瀬の音を絶
たざりにけり

爆音の山ふところをゆるがしてひゞきわたり
し朝のしづけさ　（鐵山）

峠を越ゆ

尾の上のすゝきはゆれて瀬の音の間近になれ
りこゝの岨路は

すたれたる山道ゆけば道も狭に尾花なびかひ
露こぼしたり

峠路に佇ちてを見るに谷川のうねりつばらに
麓めぐれる

上りつめかへりみすれば遠山のかさなりあひ
てうすら走れる

瀬を淺み浪のくだけて音にたてばこゝの峠の
すがしくなれり

のぼり來てこゝの峠にいこひつゝたきつ早瀬
をみればすがしも

山峽の崎の岩角つたへつゝ淀のうたかたあや
ぶみてみる

溪ふかみ瀨々の白浪早ければ音にもきこゆれ
峰根を越ゆれど

一本木松原にて

九月二十六日

ふみ入りし子らは見えねどをちこちにおらぶ
こゑあり裾の松原

たゞずみて耳をすませばかそかにも子らのこ
ゑすも秋の松原

見上ぐれど林は深み尾根みえず行衛もしらに
きのこをさがす

ひたぶるにきのこさがしてありし子の櫛にか
あらん松ヶ枝にあり

小岩井牧場

十一月廿五日

羽ばたきて鳥屋よりいでし白き鶏十羽二十羽
とうちつゞきたり

鳥屋いでし鶏の數十羽はばたきて秋の日ざし
の中を走れり

五羽十羽鶏は羽ばたきよこぎるを柵のほとり
に牛は見てをり

をちこちに白き鶏群れをなしゆきかひすれど
静かなり牧

ことなげに秋の牧場の日だまりにつどひて居
けり小羊の群

さみどりの空はつゞけり小羊の群れて越えゆ
く丘のかなたに

秋の陽を背いつぱいにあびてをりうごくこと
せぬ小羊のむれ

丘を越す羊のむれのうねりみせ静かに暮るゝ
秋の夕空

いくうねりうねりし丘の上ならむ羊いむれて
空にうつるは

越えてゆく羊の群のうねりやううつして晴れ
し丘の上の空

枯尾花穂波をうちてゆれやまず羊のかへる夕
月の丘

燕麥の畠を越えて行く羊夕月空にうせにける
かな

いつしらず羊の群は丘を越え空には白き晝の
月見ゆ

よりそひて來る仔馬に遠ざかり柵のこなたゆ
飼葉投げやる

尾をふりてませ木近くに寄りて來る仔馬の顏
を撫でてやりたり

顔なでてやれば仔馬は眼をほそめうそぶきて
けり夕日のかげに

母馬の乳を離れて間もあらぬ仔馬の顔をなで
てをる子ら　（以上、十三年作）

千鶴子病む

玄關のくぐり戸あくる音きゝてむかへし千鶴
子いまは出で來ず

枕邊にすわりて母をなぐさめし千鶴子はいま
やみつからも臥す

母のそばはなしてひとつ次の間に千鶴子の床
をしかせけるかな

病みてより千鶴はいよゝかしこげに目にもの
いはせ多くかたらず

枕邊に玩具の數をならべつゝひとり遊べる千
鶴子かなしも

枕邊につどひ來りしはらからをむかへてゑめ
り病める千鶴子は

病める母いたはるごとく泣くことをこらえて
次の部屋に立ちけり

ひもすがら臥してひとりを遊びをる千鶴子に
買へり雛人形を

うなづきて母のいふことときゝてゐし千鶴子は
いつか眠りけるかな

枕邊の京人形にものいひてひとり臥しをり病
める千鶴子は

病める子のくらき心のまどひらく鑰さへもた
ぬわれなりしかな

やしなはむ糧さへもなき乏しさにいとしき子
らはわづらひて臥す

妻と子のやまひいえぬに藥料の乏しくなりて
春は逝くなり

觀武ケ原にて

四月十日

青やかにポプラの木ぬれ立ちならび練兵場は
明みにけり

黒土のくぼみにたまる日のぬくみほのけくなりて草角ぐめり

花すみれ角ぐむほどのほのけさに陽炎たちて空晴れにけり

空はれし土のしめりにかげろひのほのめく野みち草青みたり

草の芽の青まぬほどのほのけさを土のしめりにみする陽炎

平泉にて

四月三十日

見はるかす束稲山のふもとべに家居はありて梨の花咲く

いにしへの兵どもがおもかげの目に立つ野邊
に青草の崩ゆ

のぼり行く坂をおほひて並び立つ杉の木の間
に遠き野の色

高館の裾曲めぐりて北上の水脈のひとすぢ白
くかすめり

麥畑にかげろひ立ちてあたゝかき春の日中を
皷うつ寺

病める妻の傍にて

その一

ちよろづの神はいますときくものをすべなき
ものか神にますとも

今ははやせんすべしらにいのれどもかひある
神のありとおぼえず

博士てふくすしのもりし藥はもしるしありせ
ばたゝましものを

いたづきのけながくなりていひかはすことな
くなりし閨にこほろぎ

その二

うつせみのいのちかけても今一度いやさでお
かじつまのやまひを

いえがたき病なりともひるむべきこの一念の
驗なからめや

今一度やまひのいえてわがつまのよろこぶを
もわ見ずてやむべき

一本木にて

九月二十一日

高山の尾根の茅原まねぐがになびかひ伏すと
いそぐ子のあり

高山の裾の茅原わけ入れば小袖ぬるゝとさゝ
やく子あり

萱原の青をぬらしてひとしきり雨のふれゝば
山冷えて來し

青萱を折りしき折りしき車座にすわりて食(は)め
りうまき畫めし

高原のすその茅萱の草枕まきていねたりいや
さやに冷ゆ

青萱のみどりの照のいやさやに冷えまさるな
り山のふところ

さそふ子にまかせて行かばゆかましをはてさ
へわかぬ茅原なりけり

松　原

行きゆけどはてしのわかぬ松原にひとりとな
りて鳥の音をきく

鶯宿行

十月廿七日

向つ岸湯宿は見えて土橋ゆく荷馬一匹ありにけるかな

五六羽の白き鶏しづかなる湯宿の縁をあゆみてゐたり

山下の傾斜の岸に二棟の湯宿はありて川流れたり

瀧壺によどめる水のすみとほりゆるくながる黄朽葉のあり

せかれつゝ岩角こゆるたきつ瀬の水の圓みは澄みて秋なり

岩越ゆる水のまろみに黄朽葉のかげはうつり
て秋來にけらし

せかれつゝ水底くゞる黄朽葉の日を照りかへ
し山しづかなり

風なきに黄朽葉ちりて峡の空ことあるごとく
暮れ初めにけり

冬日抄

その一

いつしかに冬おとづれて軒下の干大根はかげ
まばらなり

冬に入る山家の軒につるし柿種もろこしをつらね干したり

温室の草木のいきれほか〳〵と竹林の雀囀りにけり

ほか〳〵と冬日のさしてあたゝかき明障子や山茶花のかげ

いちめんにすゝき刈られし冬の野にうす〳〵寒く日は入りにけり

その二

うす〳〵と日はつれなくも冬づきて竹の葉べりのいろづきにけり

狹庭邊の桐の木寒く冬づけばとざしがちなる
佗住居かな

久しくもとざしゝまゝに閨のまどくれて今年
のつごもりとなる

夕づけば霽るゝ時雨の雲あかり障子にものゝ
かげをうつせり

夕風の寒けくあたる白壁や開けたるまゝの枝
折戸のかげ

うらゝかに朝空はれし日和かな冬をたのしみ
山に來にけり

月かげををり〳〵こぼす叟竹の葉ずれかそけ
く住みわぶるかな

うちぶして妹(いも)は久しも誰かまた袖の紕(ほつ)ひを取
りて縫ふべき

あひよればそぐはぬこゝろなげかるれ長きわ
づらひせんすべのなき

（以上十四年作）

（完）

大正十五年十二月十日印刷
大正十五年十二月十四日發行

著作兼發行者　小田島孤舟

印刷者　工藤倉吉
盛岡市東中野第壹地割百廿三番ノ四ノ二字六日町

發行所　盛岡市志家三地割松尾前三十六ノ廿五　杉風洞